五

德

仏々相念とは浄界の弥陀と人界の釈迦との神秘的合一

清浄光……感覚に感応し……世尊……住奇特法

歓喜光……感情に感応し……世雄……住諸仏所住

智慧光……智力に感応し……世眼……住導師行

不断光……意志に感応し……世英……住最勝道

総　徳……全精神に感応し……天尊……行如来徳

心霊界の太陽なる弥陀の霊力は常恒に十方法界を照して遺すことなし、之が釈尊なる円満なる人格に映現せり。此霊的聖喰こそ霊の生命を保養する栄養分なりその要素は酸素が空気中に含有する如く心霊界に充満す。観経に如来法界身入一切衆生心想中と又光明遍照乃至以無縁慈摂諸衆生と。釈尊は常恒念仏三昧に依て此養分を吸収し玉えり。

今日世尊住奇特法

此一段は釈尊が三昧定中に於て宇宙法界中の中心たる本尊無量光如来の最尊最霊の徳光が仏陀の全心に反映し喩えば太陽の光が金剛石に反照する如く霊的感応の状態なり。宇宙全体の最霊徳威神力に充満されたる仏陀の尊威なる実に神威霊徳不可思議なり。世尊は大威神力あり。大自在力あり。法に於て無上の権威あり。三千を震動し玉う。一切天竜八部等の為に尊崇せらるる故に世尊と云う。奇特の法に住すとは、世尊は法に於て自在を得玉えば神変不可思議種々奇蹟神辺自在不思議感応力を以て一切の凡夫衆魔外道邪見驕慢を摧伏して降伏し玉う処の、妙用ある故に奇特の法とす。此段は弥陀の大威神力が仏陀の三昧定中に顕現したるものである。然れども世尊と奇特の法につきて三身各々世尊にして、また奇特の法に住し玉うことを明さん。

此三身は本一体にして三位。三位にして而も一体である。今暫らく三身を三位に分ちて各奇特不思議の法に住し玉うことを明さば、法身仏は宇宙全体の世尊にして絶対的の奇特者である。有ゆる不思議の渕源である。今初に法身と報身との領分を分てば、如来は絶対者である中に其絶対大霊から天則によりて自然界の方面に天地万物を生産し養成し保存す。生滅変化せしむる、即ち十方に亘り三世に通じて因果律に行わるる方を法身の領分とし、絶対より相対の世界の方面に生産する処即ち自然界の方面に天則的に行わるるものを云う。

報身の領分とは天則の方面より衆生の心霊を開発して精神界に闖入して絶対無限の如来の霊界に帰入する方面である。

頃者或学者が科学と哲学との区域を定めて、すべて感覚し経験し得らるる方を科学の領分とし此方面は器械的に因果律に依て万物が行われておる。他面は精神の内観に基き思考し観察し推定し判断する等の今日的性の存する方を哲学の領分とす。若し是

の説に倣えば、前者は狭意の法身の領にて後者は報身の領である。

実には法身の身体は絶対なる大霊体にて時間空間を超絶しておる。故に十方も三世もない、学語にて真如また実体等と呼でおる。即ち宇宙全体を名けたるものにて、若し之を宗教的に表名せば、法身仏また毘盧舎那如来と号づくるのである。法身と名づくる所以は一切万法の本体の故に即ち有ゆる万法の大原則にして宇宙万有を統一し摂理しておる実体である。毘盧舎那とは梵語にて訳すれば遍一切処とて、宇宙を構成する地水火風空の一切物質元と、至大なる心象元との統一的存在にして宇宙全体を以て身であると共に心である故に宇宙は大なる人格である。

法身はあらゆる天則秩序の元首なる大主権者である。例えば人為則の立憲政の国家には人為の法則を設けて政を為す。之が主権者が無くてはならぬ如く、天則の行わるる大にして天体の有ゆる星宿の循環より地上の動植物の生成に至る迄、細大となく悉く自然の法則に係らぬ者はない。万物に秩序あり、条理あるを見ても之が統一

摂理の大主権者がなかるべからず。実に天の政の能く整然たる、古今に変せず、万代に易らず、世に天命と云い、また天則と云い、恵と云い、之が一大主権者を法身仏と名づく宇宙全一の世尊とす。

法身の奇特の法

一大心霊としての宇宙は実に不思議である。絶対的に不思議なる物は即ち宇宙の秘密蔵である。吾人の肉眼は絶対者の内容は窺い測ることができぬ。然し肉眼に映ずる皮面より見るも天に日月星宿の運行あり。地に起伏隠顕生滅変化の生物あり。吾人は只表現せられたる自然現象界の舞台の方を見ても実に其奇妙に驚歎せざるを得ぬ。世に所謂る造化の妙用などと云ういかなる手に依て造作せらるるやは解らぬ。宇宙の謎はヘツケルの云う様に容易く解るものではない。絶対者の内面即ち楽屋の裡は只舞台

の表から窺くことは不可能。宇宙の不測に就ては怪力乱神を語らぬという孔子も、天何と言ぞや。四時行われ、百物生ず。また上天の載は音もなく臭もなしとか。また君子の道は秘にして隠なりと。是らの言は孔子が或物に対する感想の発表でなかろうか。ベーコンが哲学は少し学ぶ時は無神論に陥るけれども、深く研究する時は実に九蒼無窮の玄邃高遠なるに対して人知の甚だ微にして数ならぬを知り無限者に対しては唯畏敬歎伏の外なきに至ると。宇宙秘密の蔵から天地万物の現象界は悉く発現せられたのであろう。幾多の子が一の母胎から産出されたる如く、如来蔵の胎内から産出されたる万物である。太陽も一切の星辰も地上の有ゆる生物も其順序を以て生れたる本は如来蔵から産出されたのである。密教にて胎蔵の大日と云も宇宙密蔵の胎内に一切万物を産出する母と云意味であろう。また例を換えて宇宙如来蔵を云わば或学者が宇宙全体は大なる頭脳である。実に不思議でないか。いかに吾人の脳は少とも本如来蔵から縮少せる一分子である。如来蔵という宇宙全一の頭脳から産出されたる一の頭

脳である故に、此一の脳中にも博聞強記の頭には古今に互り広く世界の事物を印象し記憶しておる。即ち万巻の書を頭脳に蔵しておる如きまた天才の芸術家の頭からは奇々妙々の句を無尽に造り出されるにあらずや。況や一切の頭脳の一大根源たる宇宙全一の頭脳よりは久遠劫の過去より尽未来際に至る宇宙一切の現象、若しは色相若しは心相等は悉く常恒不断に千変万化の事物一切を現出すると共に印象し記銘しつつあるにあらずや。絶対者は無量無辺の分身を出し種々の種類の形を現じ常恒不断に万物を建設し造営し変化し破壊し何一として其法則と力との内存せぬ処はない。一部分たる此地上にある生物の中に就て人類の如き悉く一大法身という造物主の分身ならざるはない。故に一切の生物は大なる親に倣って各造物主である。故に各自の受持的に造化作用をなす。人類には人の子を産み大根は大根の種子を造て造物の作用を営んでおる。法身の法則を以て一切生物が向上して人類と成り人類の如きは非常に精神の方面に於て発達し報身の光明を被むるべき予備を為る如くに至る。

法身の法則の下に万物の行わるる不可思議は悉く法身という統摂主権の世尊の法則に行わるる、実に不可思議なり。之を法身の世尊奇特の法に住すと為す。

報身の世尊

法身は宇宙全体が即ち其体にて天則の主権者としての世尊たり。万物造化の不測を以て奇特の法とは明せり。次に報身仏は全体の中心的本尊とし衆生の心霊を開発し霊化し成仏せしむる不可思議の法なることを説かんとす。

初めに報身仏は宇宙の中心本尊の理を明さば凡そ物にて体あれば中心あり、其中心を得れば全体を獲得することができる。

宗教には体宗用の三義を明にする。宗と云は体の中心である。其宗を挙れば悉く得。宗教の宗とは何かなるものとなれば、例せば吾人が小宇宙にして此個体に五体

四支五官五臓六腑乃至数多の機体を以て構成したる一身である。而して各官能の機能等は其掌る処を殊にして視官は物を視聴官は声を聞き乃至消化機能の食物を消化する如き各其作用を分担しておる。或は神経系の伝達営養機能の働き等恰も一国の政体を為すの機関が備つけておる如く而して一国には政を為すに統一主権者なる中心ある如くに此一身中に自我がすべての統一主権者である。

幾多の個体を集めたる一家には家長が中心にて制す。一の国家には皇帝若くは大統領が中心と為ておる。天体には太陽が中心と為りて幾多の惑星等を統率す。斯く展転して其上の統一者ありて最終の絶対界の中心なる独尊の存在を信認して之に帰命信頼するのが宗教とすれば、其絶対的の独尊なる者をば仏陀は如何なるものとか教玉える。即ち是三身の中報身如来である。報身とは浄満また光明遍照と云う。前の法身は宇宙全体を総称したるものにて、報身は其中心である。また報身は光明遍照、亦無量光如来と号して絶対界の太陽である。例えば太陽が中心としての中に最も偉大なる勢

力を以て一切の星宿に儼臨し、また地上の万物を養生する能力ある如く無量光は絶対界の太陽として一切衆生の心霊を開発し霊化し玉う大威力者である。心霊界に無数の諸仏在ませども無量光は一切諸仏の中心最尊である。故に経に無量光如来の威神光明最尊第一にして諸仏の光明能く及ぶこと能わざる処なりと。是報身として霊界の尊者たることを明す。

報身の奇特の法

法身の不思議は天則を以て天地万物を開発し自然界の万有を因果法によりて生成せし処にあり、俗に云わば造化の妙用が即ち不思議である。

報身の奇特の法とは、法身から出たる生物殊に人類として心霊的に開発し煩悩を脱却し霊化する処にあり。法身なる右の方より播布したる衆生の仏性の種子を報身の慈

愛の光明を以て心霊を長養し霊の花に霊の果を結ばしめ、永恒の生命とし円満なる人格に霊化し玉うてミオヤの許に摂取し玉う権威者である。此功用が即ち報身の奇特とす。此垢障覆深の凡夫が仏と為ることを得るは法照禅師が謂ゆる瓦礫を変じて真金と成す、是報身の奇特である。

抑も報身の奇特とは是仏智不思議智等の妙用にして例えば太陽の光力は稲実等の実の熟成の増上縁たる如く仏智の光明は衆生心霊を長養し霊化するの妙用あり。

奇特の法また妙法とも曰う。実に妙法である。法身即心より世界の方面には衆生界を産出し善悪苦楽六道生死の境界と現われ生滅変化極りなき造化の妙用も不思議である。

仏教にも或一面よりは現世界は悉く衆生の幻惑より幻現したる幻相にして此大パノラマの光景に種々の変現衆生相互に相愛し相憎苦楽憂歓悉く幻化の相のみと。併ながら此幻化の如き世界の万象も実に如来不思議の顕現ならざるはない。また絶対の

大霊が何の目的ありてか此衆生界を発展せしやを知らざれば全く只幻化に過ぎず。然れども宇宙は不思議である。

爰に於てか仏陀は不思議の根本妙法の渕源に深く悟入して絶対界の内容秘密の宝殿を開きて無量光如来の光明と同化し、斯光明は一切衆生の心霊を摂取して解脱霊化の妙用在ますことを発明し玉えり。これ大宗教家としての仏陀の教化の根底爰に存す。

仏陀が絶対界の中心本尊の大光明に接触して自ら成仏し玉いし状態を演んか。仏陀は大宇宙を観ずるに世の学者の如くに自然界の方面にのみ眼を注がずして宇宙の本体は、我精神と同一にて大なる父である。冥想に依りて絶対大霊其ものの深き深き内蔵に融込で而してアラ、仙等が観たような非想天等も悉く照破して無我の絶頂に入り生死の源罪悪の根底を亡ぼせば絶対なる舎那円満（無量光）の暖温極りなき慈愛の懐に抱かれた霊愛の光明に融合て霊なる卵は孵化して初めて心霊を覚醒なされ

た。無明の夢さめて正覚の眼を開きて観れば絶対霊界には無量光の太陽が普く十方法界の衆生を照して在ます。斯光明の照す処は永しえに真善微妙の楽苑にて常楽我浄四徳の花は栄えておる。

仏陀は斯無量光の日光が永しえに十方法界を照しています。斯光明の外に衆生の心霊を復活し霊化の徳を有するものはない。仏陀が種々の法を以て衆生を誘引し玉いしかども実は方便にして真実に宗教としての衆生教化の法は此如来の光明に摂化せられて成仏する外に道はない。他は但斯真理を示す方便にして哲学的に其理を知らしめ其論を弄せしに過ぎず。

いかにとなれば一切衆生は悉く如来法身の子であり法身より禀たる霊性は衆多の垢質に覆われて、まだ顕われざるなり。報身の光明は其心霊を孵化して霊に復活せしむるの親の慈愛である。

只言語文字の説明を以て衆生に及ぼす仮相でなく、永恒に十方法界に遍照せる親の

慈愛の光である。衆生は此真実慈愛の光を親しく被むるにあらざれば、心霊の孵化はできぬ。

仏陀の心霊が舎那円満の大我に融込で全く無我の頂点たる処正覚の眼覚て見れば舎那の光と合したる内観は絶対である。

斯大我無辺の聖徳は尽虚空に充塞して余ある霊相なるも仏陀と云う人格の中に融込で毫も遺すことはない、また其融合したる内感の妙味は言語の及ばざる処にて而して其絶対無限の大我と自己とは別々のものとは想れない。

仏陀の心霊界の日光に依て一切衆生の心霊は復活せられ、霊化せらるる、復活霊化の外に成仏と云うことはない。只名の上にのみ異にして其実は同事である。故に仏陀は自から正覚の朝より涅槃の夕に至る迄無量光の光に依て各自は自己の心霊復活すべき霊化すべきことを教玉えるのみ。但し其言語譬喩種々の因縁を以て衆生の機に随って引導し玉うのみ。

三世の諸仏も悉く斯光明に依て正覚を成ずるという事は経に説く。報身仏の衆生復活霊化の大なる威力不可思議なる功徳妙用一切の諸仏聖賢も悉く称揚讃歎し玉わざるはない。

報身は衆生の心霊を霊化して一切諸仏と等しく最霊福と最高徳との霊格とし衆生を円満に完成せしむる霊徳の奇特者である。故に経に一切諸仏も其不可思議功徳を讃歎し玉う等、是報身の尊勝と奇特の法たることを説きぬ。

応身の世尊奇特の法

仏陀は精神界の独尊である。現世界の世尊である。されば初めて降誕し玉うや自称らく、天上天下唯我独尊と。応身としては仏陀は全世界の教権の上の大権威に在ます。天に二日なく国に二王なき如く一世界には二仏出世し玉わざるが是諸仏の常法で

ある。また諸仏は究竟して諸法の実相を尽し玉えば一切諸仏は内心は同一である。

仏陀は宇宙中心の絶対権威者たる無量光の権化なれば形は人類に応同したるも神は弥陀である。霊界の中心としては弥陀。小に地上に現れては仏陀である故に仏陀は八十歳にて滅を示せども、神は本の無量寿如来に帰り玉うなり。

嚮きに法報二身の尊勝と不思議の徳用を説明し来りしも本経の文は正しく応身の徳を挙玉えることとなり。されども三身は本来一体にして内面の連絡あることをば、併べて明したるのみ。是よりは特に応身に就ての徳をのべん。

仏陀は人中の独尊。経に仏は法王たるを以て法に於て自在を得たり。尊きこと衆聖に超たりと。仏陀は絶対的独尊たる弥陀の分身として此世界の尊勝者と現われ弥陀尊より霊の鑰を預りて此土に出玉い地上の一切の衆生に教を施して弥陀慈父の手に渡すべき権威者として来り玉えり。此教権の下によらざれば絶対なる親の許に帰ることはできぬ。此権威を有する故に世尊なり。

又世尊は大自在者である。大権威者である。神聖にして毫も私なく世尊の聖意は毫も私なく如理如実神聖にして侵すべからず。絶対者の霊其ものが意志である。故に天地万物の本源に達しておる。されば自然は其命令に随う。若し仏陀が火も焚けじと曰えば火も焼こと能わず、水に命ずれば流を停むる如く、一切の事が道の如くに命令に順う。即ち世尊は大自在者の権威であるからである。

梵網経の我今盧舎那を我とは八自在我と天台は釈せり。大我の人格現なる仏陀なれば大我の電源より伝達せらるゝ力は仏陀の人格に来れり。仏陀は地上に於て一切の人類の上に立て一切の衆生を教令の下に済度し玉う権威者である。要する処、仏陀は念仏三昧に依て無量光と合一したる威神光明を以て人格を荘厳して衆生の為に儼臨し玉う世尊たり。

世尊と宗教心

世尊仏陀は大宗教家たる故に世尊なり。宗教とは何なる義となれば、宗教的関係として一方は宇宙全体を代表する中心の本尊として、一面は小宇宙たる人の中心たる霊我との合一親密なる関係の成る処に依て立つものである。今仏陀は宗教客体なる弥陀の代表現なると共に主体たる人の信仰の模範者である。故に仏陀は弥陀に対して念仏三昧を以て其霊光を感じ大なる弥陀に充されたる人格であると共に、或時は弥陀を代表して我らが前に現じては、即ち弥陀である。今経に現れたる仏陀は念仏三昧の行者であると共に導師である。

弥陀の大光明を以て全人格に顕現したる釈尊の心霊が実に尊いことは、例を以て明さば太陽の光は赫々として偏ねく地上を照しつつあり、金剛石にはキラキラと反射

しておるけれども瓦や礫には反映の光はない。其所以は太陽は自然界の最も貴き性を以て輝いておる。金剛石は鉱物中の貴重物である。太陽と宝石とは相互に感応すべき性を有ておるからである。瓦や礫は其反射すべき性を備えておらぬ。夫の如く弥陀は霊界の太陽にて其霊的光明は太陽よりはもっともっと赫燿と耀ておる。それが仏陀の心霊的宝石に反映する時は即ち世尊たる神人として輝く光が尊とい。日光の反映にて金剛石が輝く如くに仏陀の霊的人格の光は弥陀の反射である。宗教心という尊崇すべき徳性は大なる尊崇すべき物を至心に敬虔的に尊信して常に心の宝石を磨く時は何人も大霊なる弥陀の日光が映写して其人格の光輝となる。世に無宗教者と云わるる人縦令智あり才あるも霊的の性なく瓦礫に等しき漢には宗教的の霊光は感ずることができぬのである。またいかに霊に豊富なる資質を有てるも至心淬砺以て念仏三昧に精練するに非ざれば心の宝石の光は発揮せぬ。仏陀は自己の尊き霊の宝石能く琢磨して大なる弥陀の光明に映写して世尊とし、不思議なる衆生済度の功用を施し、世の光

明として世を降伏し玉えり。

奇特に方便と目的

仏陀が世尊として不思議を現じ玉う処の目的は一切衆生の精神的に従来の闇と汚と罪と苦より解脱して光と清と善と楽とに転化せしめ玉う処にあり。世に奇特の中に凡夫を転じて仏とする程奇蹟あることなし。故に仏陀の教化の目的は爰にあり。然れども衆生 罪障 深く、また邪魔驕慢等の為に還て真面目に善知識の教化に随うこと能わざるもの無きに非ず。此等を度せんには、また手段なかるべからず。されば威神自在なる世尊は何かなる機類をも度せんと欲して其善巧方便たる奇蹟即ち神変不思議を現じて夫をして其驕慢等の心を摧破して度し玉う。仏陀が身上より火を出し身下より水を出し、また火に入るも焼けず水に漂されざる如きの奇蹟を現じ玉う。

仏陀が已に正覚を成じて彼の迦葉等を度せんが為に尼連禅河の辺なる優楼頻羅迦葉という事火波羅門の家に訪らうて一夜の宿を求めしに、毒竜の石窟に宿り玉いき。時に大毒竜王大に怒て毒火を吐て世尊を害せんと欲す。世尊結跏趺座し正念動じ玉わず、口より神力の霊気を出して便わち毒烟を消滅し玉う。また火光三昧に入て毒竜を調伏し、また三帰戒を授けて鉢の中に納め玉う。迦葉此毒竜を降伏し玉うを見て世尊の奇特に感じたるも、数多の弟子に対しては曰く、年少の沙門実に奇特なりと雖も我得たる道の真なるには如じと。また弟子等が事火用の薪を割らんと斧を執れば斧揚らず等の種々の奇特を現じて老迦葉を度せんと欲し玉えども、彼は其度毎に自ら謂く年少の沙門奇特なれども我得たる道の真なるに如じと。或日迦葉が弟子と共に船に乗て尼連禅河に遊ぶ。世尊今日は必ず之を度し玉わんと欲て先に禅河に入りて神力を以て水流を両方に派れ其中を歩み玉い其河底より塵を揚ぐ。両辺は水瀑浪高く揚ぐ。迦葉船中に在りて世尊の歩む処水なきを見て希有の想を為し、驚き乍ら曰く沙門よ此船に乗り

玉いては如何と。世尊諾し玉うに忽ちに船底より現じて結跏趺座し玉うを見て益其奇異に感じけるも、然れども尚自から謂う。年少の沙門実に奇特なりと雖ども我道の真なるには如じと。慢ずる心止まざりければ世尊告て曰く汝阿羅漢に非ず、又阿羅漢道にも非ず。然るに尚自ら慚愧せず、自ら我道を得たりと云、是大我慢を起す豈愚なるに非ずやと告玉う。迦葉此勅を蒙り恐懼惜こと無く身毛弥竪て稽首して白さく大道人実に奇妙なり。我心を知り玉う。唯願くば我を度し玉えと、竟に彼は五百の弟子と俱に世尊に帰依して弟子とは成りぬ。次に那提と伽耶の二弟も各其弟子等を率い仏弟子とは為りぬ。久しからずして皆阿羅漢果を証し三明六通八解脱を得たりと。是仏陀が始め神変奇特を現じて迦葉らを降化し玉う。然るに奇蹟を現じ玉いしは方便にして其目的は彼らが真の解脱の道に非ざるを真の道と謂い、未道を得ざるに已に得たりと謂えり。彼れが矇を開き心を降伏して正真の道を以て化度し玉わん処に目的あり。

彼王舎城の人民が年少の沙門に老迦葉が弟子と為りしを疑いたりき。仏陀は其らの

疑を解しむ為に百千大衆の前に於て老迦葉に命じて諸の神変を現ぜしむ。即ち虚空に昇り身上より水を出し火を出し乃至十八変を現ぜしに衆皆之を覩て驚きて未曽有を感じ仏陀に帰依する者数多なりしと。

仏徒舎利弗の神変

須達長者が王舎城に於て深く仏陀に帰依し舎衛国に於て、凭の如きの真の教を以て人民の教化を仰がば、利益大ならんと、世尊を請ず。就て精舎を建立せんとせば諸の外道等が必ず之を拒むならん。依て外道を降伏せんが為に諸の弟子の中に於て有力の弟子を使わさんことを請う。世尊は舎利弗を使わして須達と共に赴かしむ。諸々の梵士等舎利弗に対論せんが為に赤眼梵士を撰みて闘角せしむ。即ち広き勝地に於て舎利弗と神通力を闘争せんとす。時に無慮百千の人集まれり。舎利弗外道に告ぐ、如

何ぞ我宗を建て汝破すべきや。汝が宗を我破すべき哉。赤眼云く我先に宗を立んと。即ち赤眼方術を以て庵摩羅樹を生ぜしむるに忽ちに成長して爛漫と花開き速に果を結ぶ。衆皆驚嘆せざるなし。舎利弗、大風を起して彼の樹を倒し枝葉折れ萎み忽ちに散りて形失う。次に外道が広池の内に蓮花を開かし、色香いと妙なるを現ず人々愛玩せざるはなし。舎利弗、象を化作して忽ちに花を履み荒し池は本の地と為りぬ。次に外道七頭の竜王を現じければ、舎利弗、金鶏鳥を化して竜を啖わしむ。外道また起屍鬼を化して舎利弗に向わしむ。飛かからんとすれば舎利弗、呪文を誦すれば還て外道の方に廻りて害せんとす。赤眼大に恐れ驚きて自己を忘れ即ち座より降り五体を地に投じて舎利弗を礼して救を求む。竟に外道仏法に帰して出家し具足戒を受く。此に於て大仏法の偉力に感じて仏に帰する者多く竟に祇園精舎を建て仏教を舎衛国に宣伝するに至れりと。

仏滅後仏徒の奇特

唐の善導の伝に、師西京寺の内に於て金剛法師と念仏の勝劣を較量し玉うに、言論数番にして遂に発願して曰く諸経の中、世尊の説に準ずるに念仏の一法浄土に生じ得ることを説く。一日七日一念十念阿弥陀仏定で浄土に生ずと。此是真実にして衆生を誑かさずば、即ち此堂中の二像をして惣じて皆光を放たしめ玉え。若し此念仏の法、悪にして浄土に生ぜず、衆生を誑惑せば、即ち善導をして此高座の上より大地獄に堕して長時に苦を受て永く出期なからしめよと。如意杖を以て一堂中の像を指すに、像皆光を放ち玉うと。又長安の屠児宝蔵なるあり。当時導師の勧化長安に満てり、肉を断ち買人少なし是善導勧化の為なりと。遂に刀を持て寺に詣で師を害せんと欲す。師之を見て西方を指示して浄土の相を現ず。即ち発心して身命を捨て浄土に生ぜんこと

を誓うと。

法然上人の伝に上人月輪殿に参り玉いて、数刻法談ありけり。退出の時禅閤庭上にくづれおりさせ給いて上人を礼拝し御額を地につけて、良久くありておきさせ玉えり。御涙に咽びて仰られて曰く上人地を離れて虚空に蓮花をふみ後に頭光現じて出給いつるを見ずやと。左京権大夫入道戒心中納言、阿闍梨尋玄の二人御前に候ける皆見上らざる由を申其後弥仏の如くに敬いけると。

奇特につきて卑見

宗教は何れの教にも奇蹟を言わざるなし。此奇蹟目的と為る処に階級あり。自然教の如きは火にも焼ず、刀剣も裁る能わず、凭の如き神力また咒力の故に病気を癒し種種の危難を免かる等の、唯肉体の幸福を目的とするは幼稚なる宗教意識にて、信仰に

依て悪心を転じて善心と化し凡夫を変じて聖者と霊化する如きの不思議に至っては高等なる目的とす。何の宗教にも種々の奇蹟を載すること、例えば基督の教書に種々の不思議を録せり。一片のパンを数千人に飽かしめて尚余りありとの如き、また仏経の観音普門品に一心に観音の名を称せば設い大火に入るも火も焼こと能わず、大水の中にも浅処を得ると。また殺害せられんとするも刀杖も段々に壊して死難を免るると。一切の厄難に対して無畏を施し玉うと、実に一心に観音の力を仰信して疑わざる時は、必ず不思議に其厄難を免れ、解脱を得べきこと疑うべくもあらず。

幼稚なる奇特。或は信仰の奇特として、盲者が明眼と為り跛者が起つことを得る等の如き是また信ずべきことなり。世人動すれば凭の如き奇特に対しては或は之を否定し疑惑するあり。是は其人に自ら信仰なく自己の経験になき為に疑う者なり。また其反対に宗教は奇蹟を以て全部宗教の如くに偏信するあり。

高等なる奇特。奇蹟に於ても或は一生造罪の悪人が臨終に獄火現前して苦悩に逼る

時、善知識の教に随がい改悔の一念に獄火変じて清涼の風と為り金蓮花日輪の如くに現じて浄土に往生すと、斯らはまた高等なる奇蹟なり。

斯教の奇特法

正しく斯教の奇特とは如来の大威神力が仏陀に現じ弥陀の威力を以て電力が即ち釈迦の人格に現じて神変不思議の霊力と為りし。仏陀は大権威なり。神聖なり。威神なり。此真理と力とは何人も動かすこと得ぬものである。

如来の光明宣伝する師は教主世尊に傚いて自己が弥陀の威神力を被むりて自身が弥陀の電力の受継と為りて所化の人に弥陀の大威神力を伝達すべきにあり。

弥陀の不思議なる電霊力を受継べき教師は自己の身心器械を最も強固に健全に修練せざるべからず。此弥陀の霊電力を感じて完成を要する、身心の練習は即ち念仏三昧

である。三昧の練習は精神の統一を要す。三昧練習法に就ては他章に譲る。

吾人が已に法身より稟たる自己の奥底には弥陀の威神光明に依り感応して霊を受伝すべき性を有す。弥陀の威神光明は例えば太陽の物質界に及す如く吾人の心霊界を照し玉う。斯光明には不可思議なる霊力あり、威神力あり。斯威力に依て自己が霊に復活する時は精神的に自己は弥陀の威力を感受し伝達する器械たることを得。

先に述し仏陀が諸の神変神通及び諸の奇蹟等も皆弥陀の威神光明が釈迦の身心を通じて衆生の驕慢邪見を摧破して正善の心に復活せしめ玉いし作用たるなり。不思議なる威力は火も焚こと能わず。刀杖も斬るに壊すこと能ざるべし。またたま他人の病を癒し悪癖を矯正することをも得らるべし。併しながら其は帰する処衆生をして生得の罪悪煩悩の中より霊の生命に復活せしめんが為に於のみ真なり。目的と為す処は人の子に如来の子たることを自覚せしむるにあり。肉の奴隷たる我を霊我に更生せしむるにあり。闇黒の生活より光明の生活に入らしむるにあり。

斯の如き神聖なる権威

抑宗教家の世に尊崇すべき価値は絶対なる大威神者の威力を承けて其威神力を伝達して霊的生命に復活せしむる権威を有する処にあり。若し自から霊に復活し常恒に大威神との霊的電力の交通する処無くんば、焉ぞ他の人々に之を伝達して霊感を与え其が人格まで革新することの威力を得べき。

念仏三昧とは、絶対大威力者の電力交感の契機にして三昧冥合して霊の活力を与えらるる妙法なり。

大威力者は絶対無限の大威神力を有す。此無限の電源より伝達せる受電機の大小に依って発現する処の威力は、必しも同一ならず電気の例を以ても知るべきなり。仏陀は地上に於て最大最高の受電器とし伝達者として威神の光明此三千界を震動し電

光地上に徧照す。其威力の偉大なる衆生を感動せしむる力の無限なる、仏陀が一会の説法に幾千の得道者を出し何万の信者を造り玉いし如く、実に其威力の大なること、其効果の大なること、奇特なり、不可思議なり。

仏陀自ら範を垂れ給い、何人も弥陀の大威神の光明に接触し弥陀の霊力を以て自己の力とし、最も権威ある人とし自から度しすべてをも度せよとの聖意なり。

吾人いかに世尊に倣う可き

嚮に陳し如く仏陀の世尊たる所以は仏陀の御頭脳には絶対的の大威神独尊の霊を以て安置し玉えり。金剛石に日光反映する如く、仏陀の身は有限なるも、御頭に宿り玉う大威霊は絶対無限者なり。故に仏陀は世尊なり。吾人は縦令大威霊を感受し安置する処の心王は小なりとも、然れども其威霊の源は無限なり。吾人は此絶対の大威霊

を感受し、安置せんが為には、念仏三昧修せざるべからず。斯三昧は即ち宇宙最上の尊者を安置すべきの妙法なり。